

宮原 ソニア

カーは子供の時、二年間横浜で過ごしたことを忘れないで、米国へ帰った後も日本のラーメンを食べたり、日本の音楽を聞いたりして いつも日本と繋がっていました。エール大学に入学し、日本学を専攻して 子供の時に習った 外国人の日本語を直すためにまたゼロから勉強したのです。日本に住んでいるほとんどの外国人の日本語は聞いている日本人には軽蔑しているので、はじめからきちんと習うことが大切なのだということが後になって分かり、エールで日本語を教えて下さったチャップリン先生に感謝しているのです。

一九七〇年ごろには 日本に興味を持つ人が増えて、「日本人論」についてたくさん本が書かれていました。ほとんどの本に日本人の優越性とか 日本語は世界で一番難しい言語だと言うことが書かれたのです。「親日家」か「反日家」、この間には何もなくて日本研究者はどちらかに分けられました。日本学部が経済と社会に中心した一つの理由は日本の社会が独特なものに見られていて、社会のベースになっているものを学ばなければ本当の日本人が理解 出来ないという考えが強かったのです。例えば日本のたて社会とか、何でもランキングしなければならぬという考え方を理解することが本当の日本を理解するために大切なことでした。

カーによると 日本と中国の違いはたくさんあります。中国では「中国人論」についての本は書かれなかったのです。中国人には中国の優越性は初めから与えられたのでそれを証明する必要はなかったのです。でも日本の場合はずっと昔から中国や韓国からいろいろな文化を取り入れたので 本当の日本的という物は少ないということへの劣等感を捨てるために、日本の特別さをはっきり示すことが大切になったのです。

慶応大学に留学した後、カーはイギリスのオックスフォード大学で中国を勉強することにしました。オックスフォードはエール大学とは比べられない違いがあったのでカーは驚きました。オックスフォードでは何百年という古い建物の中で勉強し、一五七二年のビール マグでビールを飲んだカーは イギリスでは現代生活の中にも古いものがまわりに残っていて、何百年前からの文化もうけついでいることに気づいたのです。カーにはイギリスに比べて日本や米国の歴史のスケールは対したことではないように見えました。

オックスフォード大学での中国の勉強は古典的で、中国学は 死んだ文化のように教えられていました。中国では共産党の四十年の文化的弾圧や中国の文化大革命が原因で大切な物がたくさんなくなりました。仏教や道教のお寺だけでなく、皇室の風俗習慣や才能を持つ工芸家の作品も全部破壊されました。カーは現代の中国では昔の寺院の安っぽいコピーしか見られないことが本当に残念だと言っています。文化大革命のために中国の伝統的な文化はもう生きていないと思う外国人が多いです。

オックスフォードでは中国の政治も教えられていました。中国の政治問題は昔からたくさんあり、カーによると中国学を専門にした人の方が思想家であり、その人たちが人間関係の交わりを通して深い感銘を与えることが出来ました。中国に興味をもつ人たちには尊敬出来る人がたくさんあったのです。

中国に比べて日本が好きな人々はもっと主観的で日本の伝統文化の「信者」になってしまうことが多いのです。「日本学」より「日本教」のようで、日本のことを客観的に話し合うことはほとんど出来なかったのです。日本の社会の中に受け入れられるためには 外国人は日本をなんとなく崇拜しないと社会になかなか受け取られないと感じたのです。日本文化を勉強している外国人たちはその文化の中に沈んで とても感情的になるのです。

現代の日本は中国と違って 伝統文化の根元 まだ実生活の中で息づいているとカーは思っています。その生きている感覚が 外国人にとってとても大切なのです。中国の場合は共産党などいろいろな政治問題の理由で 伝統文化がまもれなくて また初めから国をつくり直したのです。

一九七六年の夏にカーはデーヴィッド キッドという友達から京都に行なわれる日本伝統芸術学苑セミナーの招待をもらいました。このセミナーへ行く前までカーは日本ではあまり本当の伝統的な文化や芸術が残っていないと思っていましたが、その夏に自分の無知に気がついたのです。能の簡単に見える動き方も 本当には難しいだけでなく、それに哲学もあらわ持っていることに気がついたのです。カーは能や歌舞伎の序破急のリズムは日本のあらゆる伝統芸術の下に流れていて、その哲学は 日本にとって一番重要な文化遺産だと思っています。ほかの国のよ

うに日本の哲学は文学には特にあらわれていないけれど、日本の洗練した伝統芸術にはその国の思想があって、それがほかの国より独特な所でした。

カーは毎年そのセミナーの手伝いをするようになりました。ある活動では学生が自分で茶碗を造らなければならないのですが、カーの観察によると外国人、とくにアメリカ人には簡単な茶碗を造ることがなかなか出来なかったのです。独創性を入れて面白い物を造らなければ満足しなかったのです。でも日本人の学生は言われたとおりに‘つまらない’茶碗を造ることが出来たのです。日本では平凡なやりかたや暮らし方でも人々が幸せに暮らしていくことが出来るのです。カーによると大勢の人たちはつまらない生活を生きていかなければならないからアメリカ人が独特に強調することの結果はたくさんの人が不幸な暮らしをしているというのです。どの文化の方が良いかということは決められないのですが、両方もそれぞれ自体によって大切だと思います。あまりにも普通の生活で安心だけだったらそれより何か立派なことをしようという気持ちが無くなり困ります。しかし いつも何かオリジナルな考えを見せなければならないという考え方は 普通の人間にとって とても大変です。

私はこの章を読んで初めて日本と中国には違いがこんなにあることに気がつきました。カーは日本学者や中国学者の違いを ステレオタイプのように書いていますが、中国に興味を持つ人たちがもっと人間的だということは面白いと思いました。日本を考えてみる時 どんなことが頭にうかぶかと聞かれたら 多分歌舞伎とか富士山とか東京の町と私は答えます。日本はなんとなく平和な国で上品な感じがします。でも中国の場合は共産党とか毛沢東が頭にうかびます。中国の方が

もっと人間の関係や問題が 深く感じられます。こういう文化、そして個性の違いが人間の面白い所だと思います。